齋藤国治先生の思い出

齊藤国治先生の訃報を受け、充実した静かな90年の人生をおくるのだと言う感を深くする。最後に先生と電話でお話ししたのは去年の6月だった。中国の天文学は、吉里経などから受け継いだのものかも、知りたいと言う友人がいたので早速伺い立てたのである。齊藤先生は「独自に発達したことになっていますよ」といわれた。そこで、私は先生の1970年に旧東京天文台 Annals に発表されたコロナの月の古典的論文を使わせていただいた欣賞する中ですとお話しした。「Yohkoh 10年」の論文を書いていた中であっ。実はこの原稿を書いていた時点でも齊藤論文と太陽風の関係を調べているので、スイスの Waldmeier 博士の発見した暗い「コロナホール」は、比較的温度が低いのちそこからより速い太陽風が流れ出ているのです。いまホットなテーマになっているので、齊藤論文はその暗くて良く見えないホールの難しい密度決定をしてみせた逸品である。それで一層、天寿をまとうするとはこういうことなのかという思いがするのである。

先生との二回にわたって皆既日食観測に御一緒した。一回は1962年2月5日ニューギニアのラエだった。1000トンくらいの鹿児島大学の練習船で10日ほどゆれに揺られていった。私は酔ってしまうので食事がつるして直ぐ船内に駆けてベットに寝ていたのだが、先生は船長など食堂もゆっくり談笑しておられた。悔しかったので先生たちの三段規管は精巧でないたった、と理屈をつけていた。

先生は秦、茂さんとともにコロナの直線偏光を写真観測する4連の望遠鏡をもってこられた。日江井栄二郎さんと私は赤外の分光観測、フラッシュスペクトルの連続撮影である。アメリカ隊は冷房の効いたトレーラーを持ち込んで日本隊の装置とは雲泥の差があった。J. T. Jeffries, R. G. Athay, J. W. Firor, 全ての光学系を設計した団長の R. B. Dunn 氏など極めて強力な全アメリカ軍とも云うべき隊で、フラッシュスペクトル撮影であった。当時はコロナより、赤外線の研究が盛んであった。しかるに30年後の Yohkoh はコロナだけをみる衛星だったし、まだ分からなかったから、次期衛星の Solar-B で光球とコロナを同時に観測して因果関係をはっきりさせたいとしているのである。

日食当日の朝は陰っていたが皆既直前になって晴れ上がり、齊藤組、川口市郎さんのに京大組、当時水路部だった大脇組、アメリカ隊は大成功を収めた。私たちの大きなムービーカメラは暗かったが、たんにフィルムが絞まって動かなくなり完全な敗退だった。しかも日食直前に大プレアが 똑お円で起こっていたので、今に思いそうとは思いながら観測したが、齊藤組のプレートに象るいコロナの helmet streamer として記録された。超新星 1987 A ほどでないとしても、やはり天はしっかりと見ていて、ぐっそり観測を用意するのであろう。後に先生はこれを持って米国ボルダーハ市の HA0 (High Altitude Observatory) へ往き Tandberg-Hanssen 氏とともに解析された。他にも HA0 の人造と、全て先生の確かなる日食観測データで三つの有名な共著論文がある。

二回目は1966年10月12日の日食で、齊藤団長の下、ペルーのアレキサパ市近郊の標高3000 m の村で観測した。齊藤・秦経は同じ4連の望遠鏡を二組（外部コロナ用と内部コロナ用）、日江井・平山組は雪辱をはたすべきフラッシュスペクトル観測を行い、この時は両方とも成功し論文もだいぶ書かれた。アレキサパ市で商工会議所とか何かが主催して我々の歓迎パーティが開かれたのであるが、そのとき齊藤先生はスペイン語で堂々と挨拶をされ日食の説明までされた。フランス語をお腹に来ることとは聞い
ていたが、新たにスペイン語も勉強したとのことであった。齋藤先生は健康が優れてなかったにかかわらず、11年周期にわたってコロナの観測・解析をしたいと考えており、前後にわたり山を泰正氏や牧田貢氏に助けられてその意志が継がれた。

先生の最初の論文は、多分藤原雄矩先生との共著の論文で、1939年の東京天文会Annalsに1936年の日食観測の結果を出した。B. Lyotに捧げられたThe Sun（1953年）にH.C. van de Hulstの「白層とコロナ」の章があるが、二つ詰の論文が引用されている。その一つは東京天文台のBulletin（1948）に載ったもので、コロナの偏光の傾きが齋藤は「小さいと出ているから（確かだろう）」と書いてある。立派な論文であれば、Bulletinでも読む人は見ているのである。van de Hulstは大学院生の時に21 cm電波を予報し、コロナの観測を博士論文にした人だが、この素晴らしいレビューに登場する人はB. Lyotのほか、ノーベル賞のH. AlfvénとM. Ryle、太陽の本も書いたF. Hoyle、クーサーの発見者M. Schmidt、I.S. Shklovsky、L. Bierman、M. Schwarzschildとまぶしいばかりの顔ぶれである。そこに齋藤先生のほか宮本正夫先生などがあり、日本人の被引用率は最近よりずっと高い。ちなみにこれらの大先生たちは、コロナが百万度である理由が分かったからではなく、分からないままに何かの面白いことに転じたのである。私は最近「分かりた」と思うようになったが、誰も信用してくれない（IAU Symp. 203, 495）。狼少年は、この半世紀の間に千回は現れただろうから無いもの。

このところ私は勤め先で一般文書学の授業もしており、齋藤先生の「古天文学」の話も加えていられる。しかし分からない点も多々あり、お宅に伺った時に教わった。部屋の中の書棚は「明月記」だの難しきような漢籍・和書が壁いっぱいに並んでおり、天体物理の本はどこにも見当たらなかった。奥様はお金がかかるのですよといわれた。天文台を退官後その方面の本を9冊書かれたそうだが、岩波新書の「星の古記録」お見逃し品である。話し合っているうちに「平山君、君もやりませんか」といわれた。惑星などの軌道の計算なら少し勉強すればできるだろうが、大変なのは虫食い崩し字から始まって、「天文博士」が見てもいない天体現象を述べたりする環境など、一たんでは身に付かな学業が出来ないだろう。しかる先生は、例えば神田茂著「日本天文史料」に載っている事例のほとんど全部を調べ尽くされらしい。「それは無理ですよ」と答えて、御著書の「定家・明月記」の天文記録－古天文学による解釈－（慶友社1999年）を頂戴して退散し、自分の本棚の手が届かない高い所にうやうやしく置いたのである。一緒にいただいた「青淵」平成11年2月号に書かれた記事を今読むと、7176番の小惑星にKunijiと言う名前が付けられたが「自分の名の付いた小天体が宇宙を飛び回っているのは心-randomな限りです」とあった。合掌。

（明星大学・元国立天文台）